



忘れられない患者さん

医学生の際、唯一赤点をとってしまったのが「肝臓病学」だった。ずっと「肝臓」に苦手意識をもっていた。ぼくが研修した病院は当時、肝臓病の患者さんが多かった。C型肝炎の治療にインターフェロンを用いていた時代だ。ウイルス性肝炎や肝硬変の患者さんが多く入院していた。朝の採血は研修医の仕事なのだが失敗ばかり。患者さんの腕に青あざをたくさん作ってしまった。そんな不器用なぼくを患者さんは温かく毎日迎えてくれた。慢性肝疾患の患者さんは不思議な包容力をもっている。

専攻医のときにB型肝炎の患者さんを受けもった。40代の女性だった。抗ウイルス薬による治療を受けていたが、彼女は10年以上肝がんの再発で治療に向き合っていた。経過中に肺にも転移したが弱音を吐かず治療に立ち向かっていた。ぼくが訪室すると、時折目に涙を浮かべてつらい心中を語ってくれたこともあった。あるとき黄疸を主訴に受診した。そのまま入院となった。多量の腹水が貯留し、見た目にも苦しそうだ。日に日に弱っていき口からは何も入らない。そんなときだった。「何か食べたものはありますか?」と尋ねると、「パンプキンケーキ」と彼女は答えた。ぼくは近くのお店を走り回り、「かぼちゃのケーキ」を見つけた。急いで病室まで戻りケーキを見せたときの表情は忘れられない。その数日後、帰らぬ人となった。多くの出会いと別れ。パンプキンケーキという言葉を聞くたびに、研修医の際の苦く甘い思い出がよみがえる。

今回の特集号、いかがでしたでしょうか。肝疾患で悩む患者さんを支える一助となれば幸いです。

中野弘康(竹山病院 内科)

編集委員

- | | |
|-------|---|
| 官澤 洋平 | (神戸大学医学部附属病院 総合内科) |
| 櫻井 広子 | (社団医療法人緑川会 介護老人保健施設ふれんどリー岩泉/
京都大学大学院 医学研究科国際保健学講座社会疫学分野) |
| 長野 広之 | (天理よろづ相談所病院 総合内科) |
| 原田 侑典 | (獨協医科大学 総合診療医学) |
| 宮本 侑達 | (ひまわりクリニック/
名古屋大学 医学系研究科発育・加齢医学講座総合診療医学分野) |

A good book has no ending.



治療 CHIRYO vol. 108 no.5

© 2026

2026年4月1日発行

発行者

株式会社南山堂 代表者 鈴木幹太 編集長 片桐洋平

〒113-0034 東京都文京区湯島 4-1-11

TEL 代表 03-5689-7850 www.nanzando.com

DTP クニメディア株式会社/
有限会社タイプフェイス

印刷 クニメディア株式会社

978-4-525-93028-8

JCOPY <出版者著作権管理機構 委託出版物>

複製を行う場合はそのつど事前に(一社)出版者著作権管理機構(電話 03-5244-5088, FAX 03-5244-5089, e-mail: info@jcopy.or.jp)の許諾を得るようお願いいたします。本書の内容を無断で複製することは、著作権法上での例外を除き禁じられています。また、代行業者等の第三者に依頼してスキャニング、デジタルデータ化を行うことは認められておりません。



A 9 0 0 8 0 4 0 8 0 4 - A